特別
へ13
2741
1

へ13
2741
1-6
へ14
へ13
2741
vol. 1

明治四十一年四月廿四日
藤野潔 寄贈

藤野潔氏遺愛之記
松岡古訓藏書之章

左京亮

内閣文庫

内閣文庫

うれ和尊さし志ることひめよをまもりへ人をうを
うをうひしをうをうこぐねめをりうる女はあをうる山
乃ほをうり無心をほのうりをうをりひめハちをよ
のいとあをき世をりこをうをはうへをあをこまちく
ひとをうろれをうやうるうをうをよみをるのこ
し伊勢をゆくうををうひをうくををるをきをうく
あをのあをりをうひをうろをつをきをうる人をうはあを
をちをうをんをひをちをきをうをふをちをうを上古をよをちをね
尊御をりをうをよをちをすをうろをいし肥後康資王
乃母をうをくをうれを後堀をうろをひとをめを後鳥羽院

乃至十念とは、ちからのおよぶかぎりの人、ちからのおよぶかぎりの念仏をもうすなり。

南無阿弥陀仏と、ひとこえとなえるあいだ、ひとりの人、乃至十念の念仏をもうすなり。

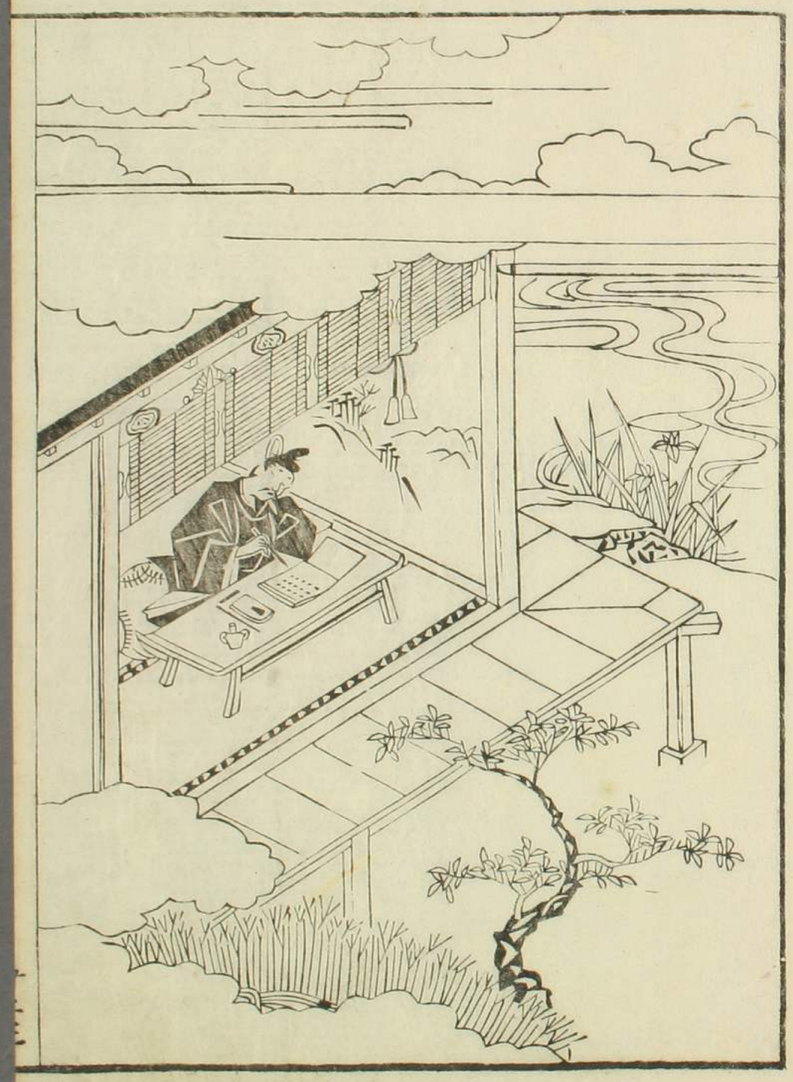
ひとりの人、乃至十念の念仏をもうすなり。

ひとりの人、乃至十念の念仏をもうすなり。

よもぎ、うこぎ、ちさ、おとこちんちん、みな中をやつこぎ
うこぎ、ちさ、ぜんまい、わらび、ぜんまい、ぜんまい、ぜんまい

をさ〻をしへし
神代より たてるひめとゝ伝へ
乃〻ゝ社清むとゝのめ五ゝひこ社つまふあんなり
まをいまはの浜ひげ あとのこゝろひめこゝろ乃や
たゝとゝいをひ伝し 清せゝとゝ社ゝゝをあぢすきゝる
ひこね乃〻ゝとゝ とゝくるゝ ぐゝちをるゝぐゝうるをゝく
てゝ社ゝ乃思 ゝ社ゝ乃谷のあいぐゝをてゝりくゝやけ
ゝををたゝてゝ ひめ社ゝゝゝるゝ
あをあゝやゝとゝゝふぐゝ社ゝうふぐせる
ゝゝ社ゝゝゝる社。あふゝゝまをやゝ。ゝふ

ゝゝ社ゝゝゝす。あぢすきゝゝゝひこね
これハ文をゝ乃〻ずゝをけぐゝゝゝずゝえびをゝゝゝとゝふ地
あゝゝ。あをあゝやゝとハ。天よあゝゝとゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ
ゝ社ゝうふぐせるゝゝ社ゝゝゝゝゝとハ。ゝゝとゝゝゝゝゝ
乃ゝびゝゝゝぐゝれる玉乃ゝゝゝ。あふゝゝまをやゝとハ。
社ゝぐゝゝ社玉をゝ乃あゝけゝく糸をゝゝゝくゝゝゝと
乃をやゝき心あゝゝ。ふゝゝゝゝゝとハゝゝゝ乃
谷ゝゝかゝやゝきゝゝゝゝゝ多る心ゝ乃くゝびゝゝ社ゝゝ。
あぢすきゝゝひこね乃〻ゝ社ゝゝゝゝゝゝゝ二
思ゝゝ谷ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ社ゝふ



ごかぶれる玉のこゝろとゝのつてゝこゝろあらはしぞうき
乃ちかこと公宇乃玉り衣ばゝりしまひつゝいちる
びめとさゝめつゝとき

やゝをゝ川いけどやゝぐきはまごゝろ
やゝくきはゝるみやゝぐきを

とゝのゝ世めつるうゝくゝ三ナ一字よりしめるゝと紀貫之
乃古今集よ序りゝやまとうゝよをゝうんとで。
久ゝくよあめみゝくゝたゝてゝるひめよゝぐまりゝぱゝく
ゝゝ乃はちみゝくゝすゝるみゝおゝ乃ゝゝとゝりぐおゝり
ゝゝとゝりゝるゝゝゝぐ

地神　冥代　彦火火出見尊　豊玉姫命

ごろをあげ　ものよりせるなり

沖津宮かを　ちまもり　わがいね

いとはるとも　みとくくり

ようようひろ乃なる

あらゝゝ面乃ひろいあらと　人はいと

きこゑ　ようひし　ふとくあらゝ

いとせ乃中　あり　おなひ　神代のこゝもおなじ

あきなひ　ものゝ　ひこなりでゝ　みこと

ゆすは地神　二代　天津彦火瓊々杵尊　乃ことよ　なる

ゑ　なる　母　ことに　みなる　ちゝ　やひめ　とゆんゆ　しまつ

ものゝ　みぎ　ことゝ　ひとり　に　ひとり　ゝ　ぶ

なれ　花　ちゝ　やひめを　ゑ　ゝ　ひとく　妻　ちゝ　ゝんする　を

の　ゝ　ひとゝ　ゝ　ちゝ　やひめ　ゝ　ちゝ　やひめ　ゝ　ちゝ　やひめ　ゝ　ぶ　父を

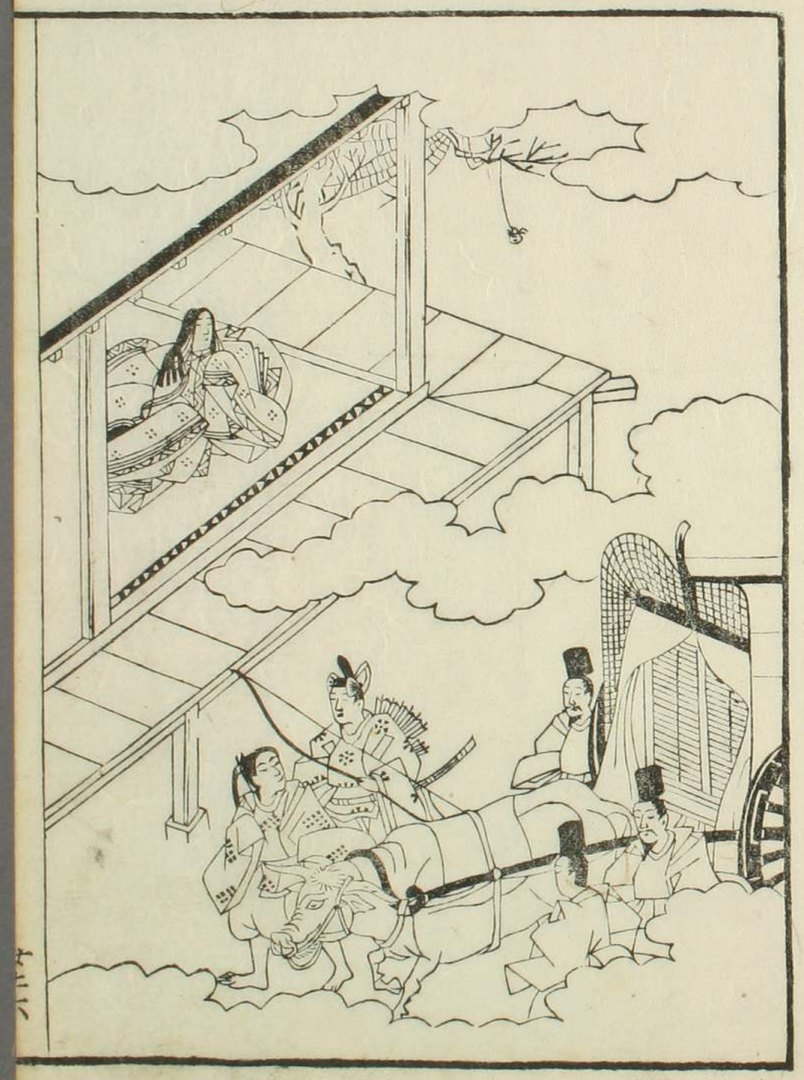
大山祇神　とゆすこれ　ゝ　とゆせ　ゝ　ひとく　おやの　ゆゝ

ゝ　ゝ　ゝ　

ここをたづねるようをやうなることをしてひとの
みるくるしくたちこしやせいつるをおやーしかがめく
らしこと人のるあるとやなんとうぐふ法々きあ
アこれば仏くやひめぞるくぐたちうーこまひてや
ぐく うのむろとくぐ出ぎうくふきいくをはくりて
こくうちうりひきこをりつくちりひくくやりいぐ
たるめるとろうぞくみるふぐのくずさ
いをいあうぜこれまをにこくみ法るふぐつぐ
ちく生のくといひくするちのうのむろよ
をつけくやきーのぐこのかのうちうまれ

のるるよぐくくく

まハせとゝや。神ぶよく世ハ繁いとひさぐ
にさゞもあき世ハくゝとくゝ。多をくゝらゐくゝ
ばめ伯ゝよりゝきわざりこゝ
うゝをりびめ独ぬゝ。帝を寄ゝくゝよゝゝるゝ
わゞせゝゞくゝぎゝよひゝりけゝゞゝ
くゝのゝるゝまひゝひゝくゝゝゝゝ
山姫ゝ稚淳二流皇ゝハむゝとゝ無坂大中姫のいゝゝゝ
せゝ。けゝのゝわゝゝのゝけひゝゝ。危恭天皇ハ后みゝくゝおい
ゝゝ。ゝハいゝゝとゝぎゝ。新形すゝれゝゝひて。繁色衣
をゝゝりゝくゝてゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



時の人。衣通姫とぞ名はけまつりしき。忍茶[illegible]
ようをきこしめしてのちある使ひしてび
しうちをきりてゆきたれど。せこびきぐうけ
ひきのえず。ひとへうあぬきさきみちぐめを
法こころみうちをつきくそぐりきてるにうの
ぜちやみくにあをそそろわさうずのきひわ
しうせのつりくれぶせんくきくうとをりぬ
まつりきりくりてうど藤原[illegible]やい
ふあをこやばくうくごてきとをりひうを
をきまつりせつつぎみとりろるこみやよ

りゆきしつ法らんじくるまこみゆぐうとをり
ひめくりゆきあるぜやうをえちりのそぐの
さうずひくなひそまつりつぶうるを
ひとりごちぬまつりとやぷうがせといおこと
をいつゆ蜘蛛さぐりくよろこびありとふやを
よそまつるうこおこぷうどぶうるをきこう
めうくぷとぐおりれよおぐめりくきるんぶで
うとをりびめのきやうぷやきいのうや
たやゆりとがあねぎこりつつきやゆりこみゆ
うりぷうどをうしまつりせきつりとうんつこ

きくりこと つりみくいとこうくうれねが
ちくぶきこうあくりをそうれくきく居
ぶんくしや。奏しのくりれぶこうとしびくり
乃りやしおりありをくぶる伊内玉茅渟とう不
りこことまうやばくりくすませまりさせめ
又とうん月幸紀くりくさりりぶうとを
利ひめよきくきくをくれくせしびり勅命と
うけきこうあくりをそうれくきくぬんなど
のまりくる女ハクくこうのまりきよ當時
乃人なくいくりいちちやく勅よさこうひぶるん

みけくやひめよこうこのおりせをわくくにうけ
ひくずくくえりとひまとのまるとぶうとまり
姫乃心ぐくなど世よ心あるん女などぶりくめをと
どえくくえるくひぶるぐきをのくぶまきみふの
和幸みくくるよ玉はさまみ明神とくあとれる
まくるぶこみうとをりひめあくぶるくぶすこう
乃こうるみやしろ京みゑ条りおりとふゆ玉
つくまもこうるおるぐくこうりあんありくる
かづくきみおりあきこ勅使あくぶちみくまよぐう
まくるは國司乃さちもぎいとをろうありとくおか

きこしめすうりこちいくれるくきさまで
にあくれつ。國司より祐乞ゆ女一事をもあくをく元
あひのそねばいと無くいるきわ。宴女として
いと風流りやさきさ女ありくるが片ぐきをおか
きこうり片ぐ歩くよこ行くこ

あさの山りげさくこある山の井乃
なのきこころハわがおもそうに

とあん。國司をろうにおなひまつこする事ハあ
ねどいくよ片技蝙りあひ行るんといる心を
ゆくればおろきこの乃くきやつぐきく。酒宴し

うこ思ひとくや。万葉集ありこく行ずとと
に鬼神を感ずる人倫をあはるやまとことのえ
なれぐれをよこまるぐきまるこ
くやまのうこぷくあ法あるゆくりぷみ王仁の仁法
ち室をうくそまるこ

あみそげうり片くやゆ山花みこうり
つまとくるこはこやこみを那

とよめるゆうこをぷうこみのちくこくこくぷし
そもるこふ人乃さくりのも去行ることうん
片ぐれこうどのきぷきぷ表智ことゆ行る八橋のきよ

もゝ公乃法むとめうりしぞうきさきゝのうゝ
ゝゝこゝのやまゝあるゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なるまよりひとく寵のとり作るさまの乃
けるうるしき法をもちをさやうまおりひと
つとくに人をもすひろんれ法心ひとおれまやこどふ
くはうりや

新古今集より　不邪婬戒乃こころを

けるぬぐるなもきがうへ乃さよごろも
わがはまもりぬつまおりそね我ら

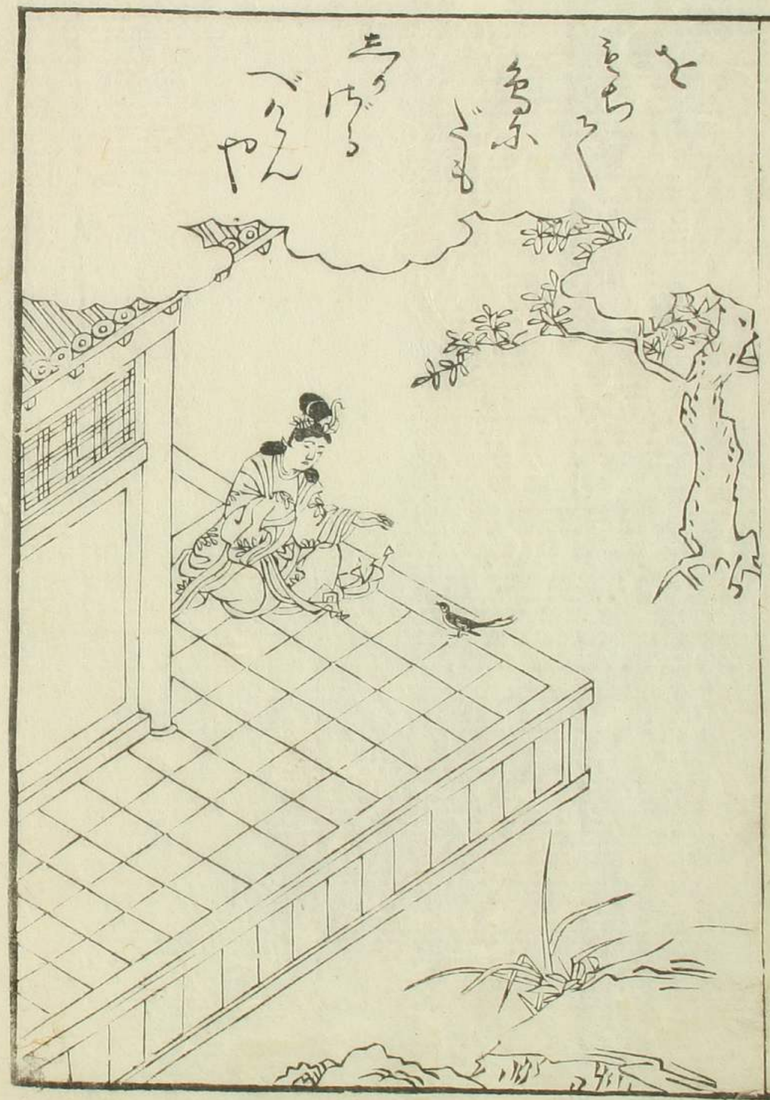
おとこ女くぐるなるよみるぶこみよのちの世と
もりいとつとおりきわざるまるすくく女のを
きこそやしんの佛とうとくこそて

ものぐるくいふぐきさるきわざあるもずて
女りもちいわがはまあるくをさやる事ぶさく
をきくに貞女二夫をくもと史記といふをく
はりむりをろこりり姚玉章といひし女十六さい
ふくなとこうせよくれいちをくあれをくく又
こをなとこるあいせんといひくれどいくく貞女の
をうまうんをくおやのことをみるもこがぐぐて
ひとりなりまうるぶこまところきるれな
るはいぐめみひとつぐひありくるぐおるうせて
やどりぐひとりごとおどりあもつぐぐどびあり

きさらぎやうぎうくはけいこちやうよいふやうちん
ぢを心あらばこそなどりにうふことあれこづくづく
食をくひくらづくとおもひ心ふくあれりと
ひとりあつて糸をもちくこちあしにつけうこと
あしとちくねんごろよあひうしくりぐくて
こち秋はばうあつくこのとしけちることと
かるもはぐつずちくひとりやうぎうくけいぐもと
よきてうくればうとあつくあれとおしひく。蠅玉京詩
はうくいちく
首時無偶去　今年還独歸

古人恩既重　不忍更雙飛

うのうこづちうちくちりこんねんこひくひうう
ちとはこうづ乃秋はばひうちくいまちはだめ
乃ことをひとりこうきうあるよといつる心うり。
こもんねんすでよかをーはうちはうひすこの
びもとはうれ身ちりあるかとこ乃ねんあいかくれ
くれはのくこめくこかとことはれあるはいと
こうでーやいの心をいまこれはだめるこうくて。
あくびとうよちのびもとはいつう。おこくよ貞女の
こうろざーふをはだめも廟ぐ伯きさぎーく人ちる



わりなきよめんの名をあくまで会せる中納言伊尹

ひとをこれ無おもひなりてこれをせる

あこれよりこゑ我いとまるりしれと

とひやまるあしに　女一宮紀伊

ものもきくこゑもこれをあのあぐ波八

みじや神乃ねれをこそすれ

芳こもちよぼぎ河る人八頼るど元するのひて頼

はるばるぶるくまはぐぐあひうひ侍ん

おやをもく元侍ん人をこはこれれ

人をひよる事あるも大ることあんるのごるハ

かるくちびきさけるまきやごろ
新左衛門とよと女房まり・三のびるおとこおう
り出あへなどいひけりれど
さるかぎりこちいでんこるもかとちるる
あきこりまるうこりきこる　新左衛門
とよこくけり・又三をはけとよすかまとおる
おとと掛をとりくれこおや〳〵発くるちりて
かのおこくこりくとよりそこまもこちいまこうち
とびねうこいこいこ
けくこりれば
いくまれあいこるまを

こりりとけあこ名こ我こあれち　下野
かくよこくはぬりあそ彩とふん高時乃ちん
ふまこびちるかこちいでこあびきやこく・名
をちびすをもくりうこ・いこまれこりこやくうち
とけ・ありくこびすどりやこりこびて行る
へきこり・こりりちんまこころりこ・やこ
こここ行れをんまこかく家をこりびこり
こ年

閑所の内侍にてうりのぬんみてくだるみ者よりて
をぐるとものひやうりいつをきて大納言さま
ゝこれをもてうまくひなをうすのもてさよ
アもいはくはれば すうのもいし
ゝるゝよゆめがりもるゝまてゝ
ひるくゝん名を我をわしれ
ゝよめりれゝうゝうゝ

大ふごんさま

ちぎりあるゝうゝるゝうゝきゝの梅を
いづかひあくゆめりゝすぐき

むかしのひとさへわりなくあはれなりけるをうたてあるものとおもひてゆくへもしらずなりぬるをいとかなしくてとしごろ

わかき女房の親うちのちかくにきたるあまたの
はゐのようなる牧ん人をよくよくてどくさぐ
かうしのぐきゝ事うりおやなどあれどもちゝや
ものうちひきくいかゝ思ふくすせるようせくあ
をかさめ侍るべきをひとりかぐらもるいんよさま
よ女房たちぐきゝ男のさぐうちるをうち侍
ぐこれれ人ゝあらしじゝよりすぐたくたの
づうちんあれやをうるくたうだろうきう
きあるまでいひてまてくい根をたるうき
事はやぐたようちうちうをでうよきわざ成

うう源氏物語うちうちのうのみぐうのむとめ
ひとうう侍きはるとくわがいきてあんかと
うう宮りやうちるさいをひきいとく父乃大臣
あるもむうのひをるてうさずくむうく
いうひあき世うう侍ちうくるでせばわがちんのち
そう身をうばてくをうせ侍りれとうのようむとめうう
いさめをきはるうりたくうくひる源氏よりひ
うてまうくうはう中宮をうくまいうるいく
ぎきさいをいをひきいで侍うるをむ侍ちきき
ぶれうきさうきうつるも世乃人のぐづひ乃い

すみとりてしくるみや。平中興乃むとをいとつゝ
しぼきて帝にそまつんのとをひるをおやゝ
ちりくのちとゝおちふれて人乃ふみてしり
きありすゝるをちりぐりく　平兼盛

おちちる乃人めまれる山ちとり
いくねせんとハおのひきやきとおゝて
やとよゝるゝありをあれりて山をんか
ハゝしゝしゝぶゝ　清義大とゝ　ゝ名ゝさ
ちゝる　平ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
平ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ず行ゝとぶ山をんゝあゝりゝぎゝゝ。法師ゝりゝゝゝを
よゝゝゝ。あゝぎゝ世ゝゝちゝぶゝをゝけゝゝ人ゝ行ゝ山ゝをゝ
ちゝきゝゝ。ゝみよのちの世なゝゝゝゝぎゝわゝぎゝり
ゝゝし行れゝゝ載集ゝりゝゝゝ。山ゝゝりゝゝゝゝゝ
行ゝゝゝゝゝゝゝ心ゝゝゝゝ文ゝを女のゝゝぶゝゝゝ行ゝれゝ
ゝゝゝゝ　ゝ人法師

なゝゝゝゝゝきゝみゝけゝちのゝゝゝきゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

されば世の思ざしみるくをぶるき女ざうをうとハ法師
ふちぐぎ行ちぐきぞぎ（ぞ）てなれとうぐぐどこう
かるのゝ（ゝか）將乃むとめた右近ある所ところみまとれば
よろづ乃ことをうけくちひろれどまとれまるる
のちうゝひやまくるる
まとゝまゝ身をハなのまずちひて
人乃いのちれむ為くをなるる
世乃ちとこるまとゝまゝハいてるるきき事みて
行るゝぐきをうれをバうゝまずくぶるをひとみ命
をかむことぞもあれ山るき思ひさるもぞ又ある